



## Press Release

2022年3月発信

## 報道関係者各位

軽井沢現代美術館2022年の展示企画をお知らせいたします。詳しくは広報担当までお問い合わせくださいませ。

1F常設展示室 4月28日(木)～11月23日(水)

## 海を渡った画家たち

## 【概要】

昨今、国内のアートマーケットは目覚ましい賑わいを見せています。

新型コロナウイルスの脅威から解放されたとは言えない状況下にも関わらず、大手オークションハウスでは予想を上回る落札総額を記録し、アートフェアやギャラリーにおける売上も好調だと言います。

さながら「アートバブル」とも呼ぶべきこの現象は、欧米の規模と比べると遠く及ばない水準であるとは言え、日本のアート、特に現代美術への関心が若年層を中心に裾野を広げ、市場が拡大しつつあることを示しています。

これまでに洋画や工芸を蒐集してきた層とは異なる新しいコレクターたちの参入によって、美術市場後進国のわが国にとって今後作品流通が活性化していくことが大いに期待されるところでしょう。

一方、当館の創業者・谷川憲正は、海外へと活躍の場を求め、あえて苦難の道を歩んだ作家たちに魅了され、コレクションを続けてまいりました。

まるで作品と一体化してしまうかのような気迫で絵の具と格闘しながら描かれた絵画、ひたすら一つの素材と向き合い試行錯誤を繰り返した造形的な実験、作家の自我そのものを映し出すユニークなモチーフや色彩。

本展でご覧いただくのは、アーティストたちの手業の痕跡が残る、アナログで不器用な、それでいてなによりも生き生きとした作品の数々です。それぞれの時代、それぞれの国で、作家が生きた「現在」は、時を経てもなお色褪せることなく、いっそう力強い言葉となって私たちに語りかけます。

また、今回は国内外で熱い注目を集める日本人アーティストのひとり、井田幸昌の作品を初展示いたします。二度と訪れることのない一期一会の瞬間をメインテーマに制作する井田も、当館の「海を渡った画家たち」の系譜を未来へつなぐ存在として、時を超え、海を越え、今後も心を揺さぶる作品を生み出し続けることでしょう。

戦後から現代に至るまでの20数名の作家たちによる作品を、どうぞご覧くださいませ。

## ●出展作家

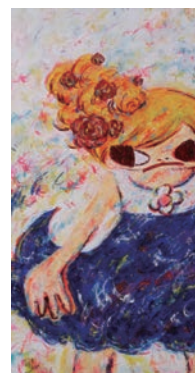
井田幸昌、今井俊満、上前智祐、榎本和子、金沢健一、草間彌生、白髪一雄、菅木志雄、関根伸夫、高崎元尚、堂本尚郎、戸谷茂雄、流政之、奈良美智、名和晃平、東恩納裕一、福島秀子、眞板雅文、宮脇愛子、村上隆、山崎つる子、ロッカクアヤコ(五十音順) 他



「分集位一小辺一」  
1991年 木に彩色 73.5×41cm  
菅木志雄



「無題」  
色紙に油彩 27.2×24.2cm  
白髪一雄



「Untitled」  
2009年 キャンバスにアクリル 144.4×75cm  
ロッカクアヤコ

掲載ご希望の方は広報へお問い合わせください。

海画廊(軽井沢現代美術館 東京事務所)

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1 三省堂書店神保町本店4階

TEL/FAX 03-3233-3359 E-MAIL info@umigallery.net (広報担当:稲村・丸山)



## Press Release

2022年3月発信

2F企画展示室 【前期】4月28日（木）～9月5日（月）

## 矢島史織 ーめくるめく、ひとときの白ー

白い光は降り注ぐのではなく、そこら中にある。自然の中、子どもの瞳の中、そして私自身の瞼の中にも。掬い上げて作品へと昇華させていくその工程、つまり絵作りについて考え直す機会が最近あり、改めて白い画面の中で新しい冒険を試みた。まだ冒険の途中であるが、古典的な技法で現代的な表現を目指したいという想いが強くある。

「光と影」を現象と心象の二つの方向から描いた作品は私自身の影であり光でもある。八ヶ岳の樹影や木漏れ日、そして画面の奥へとつながる空間を描いた作品は、楕円型の光の現象による空間を意識した青い風景画である。一方で「Monster」のシリーズは不可視である脳の発達からイメージを膨らませた作品で、画面としては平面的な描き方をしている。この「Monster」は子どもの脳の成長を観察して感じた事がそのまま具象となっている。最新のシリーズ、森とその影をモノトーンで描いた「光の森」は、画面構成をいくつかに分ける事から始める試みをし、一番上の層に金箔を装飾的に配置したところが特徴的である。これらの作品は画面に対して異なるアプローチをしているが根底にあるものは同じである。

子どもの頃はフワフワとした雲の中の、空想の世界の住人であった。今は雲肌麻紙にうっすらと胡粉をかけた優しい白い色から作品作りが始まる。かつてのようにどっぷりと世界に入り込む事が出来たらその作品は上手くいったと言えるのではないかと思う。

矢島史織



「Monster #20」  
2021年 雲肌麻紙、膠、墨、岩絵具 90×90cm  
矢島史織



「光の森」  
2021年 雲肌麻紙、膠、墨、岩絵具、金箔 162.1×130.3cm  
矢島史織

2F企画展示室 【後期】9月8日（木）～11月23日（水）

## 松井亜希子 ー水鏡にうつる森ー

2020年以降、内面と向き合う機会が増える中で少しでも外界に触れると、以前とは違う鮮やかさで世界が知覚できるようになりました。

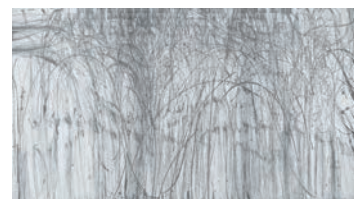
唐松岳に登り目にした厳しい緊張感のある稜線、上高地での澄んだ湖に映る鮮やかな森の緑、屋久島の熱帯植物の湿度のある生命感、滋賀の私のアトリエから眺めることのできる血管のようにも見える木々の枝分かれの様子。このように私が滞在先で見た風景や、普段見ている風景の形を抽出しつつ、風景と身体のかたちを重ね合わせて描き銅版画にしています。

銅版画は鏡であり、あらゆるものをうつす存在です。さまざまなかたちや存在が映し出された銅版画は鑑賞者の方さえも映すような存在でありたいと思っています。

松井亜希子



「Molecules of our bodies are interchanging」  
2018年 銅版画 120×180cm  
松井亜希子



「MIRRORS -cave」  
2020年 銅版画 100×130cm  
松井亜希子

掲載ご希望の方は広報へお問い合わせください。

海画廊（軽井沢現代美術館 東京事務所）

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1 三省堂書店神保町本店4階

TEL/FAX 03-3233-3359 E-MAIL info@umigallery.net (広報担当:稲村・丸山)